



學會彙報

雑誌名	漢文學會々報
巻	9
ページ	76-79
発行年	1939-03-25
URL	http://hdl.handle.net/2241/00146918

耳。客握余手曰。子之志也壯。子之意也善。因余退。記與客問答語爲跋。

止軒曰。前序雄渾遒勁。後序平明清秀。二文共推傑作。文末眷々。懷及父恩師德。情意凄然。使人不堪卒讀。

贈齊白石翁 有序

戊寅秋。借張君次溪。訪齊白石翁于借山樓。遂荷以詩集二本相貽。拜讀之下。知翁湖南湘潭人。壯遭離亂。潛身衡嶽。備嘗艱險。以全性命。而其詩與畫。更脫盡恒蹊。若有天風之下玉鸞。因賦短章。藉志景仰。

焦心日夜湘潭空。衡嶽渾成造化功。鐵筆輪囷奇且巧。古來文藝數斯翁。

旅淮有感 有序

己卯正月。汪子雲先生。掌皖省文衡。致書聘余。擔任顧問。以資臂助。余與先生相識。已五載。不能遏拂其意。旋其月十九日。東裝就道。二十一日到淮。有感乃作。

朔風蕭瑟故城邊。振鐸淮南辭幽燕。十室九空無限淚。麗春未到水連天。

學會彙報

○第廿一回研究發表會

十一月二十六日(土曜日)午後一時より、西館漢文學科第一研究室に於て左の如く開催す。

一、朱子成書年次試論 學生 林 宇三郎君

一、穀梁善於經說に就いて ” ” 富山 昇 君

一、講評 會長 諸橋 教授

右終了後、茶話會に移り、夏期休暇を利用して、南洋視察旅行に參加したる、三年生古澤未知男君の「南洋視察談」を聴く。人情、風俗、教育、生活狀態等に説き及んで異國情緒興味津津たるものありしも、恰も防空演習の爲、電燈を懸念して早く切り上ぐ。

○秋季特別講演會

京都帝國大學教授倉石武四郎氏の上京を機とし聘して講演會を開く。

場所 本學西館本部會議室

日時 十一月二十九日 自午後四時至六時

” 三十日 ” 三時至五時

十二月一日 ” 四時至六時

諸橋會長の御紹介を兼ねたる開會之辭あり。連日、先輩、高等師範文二生、等聽講者滿堂の盛況なりき。十二月一日終了後、若溪會館にて會食をなし、座談會を催し、御懇切なる御指導を仰ぐ。聽講先輩左の如し。

田波、小林、小島、渡邊、上島、石島、市川、鎌田、飯田、陳蔡の諸氏。

講演要旨は左の如し。

我國と支那との文化的交渉は實に一千數百年の久しきに涉り、其の文化を流通せしめた工具としては言語文字が最も重要な地位を占むるものである。従つて支那の言語文字が邦人に學習されたことも極めて久しく、之を時代又は環境に因つて或は漢文と稱し、或は支那語と稱するが、若し大處高處より之を觀れば固より一物の異稱たるに過ぎぬこと猶英文英語の區別し難きと同然である。たゞ、徳川時代には邦人の海外發展が禁絶された結果として支那語は單に長崎の一孔を通ずる貿易として活き、漢文は之に反して普通教育の全般を占め、殆んど國語國文の領域を擅有したが爲に、支那語と漢文とは天淵も蓋ならざる如き觀を呈し、二三達識の士が其の蒙を啓かんと務めたが、固より大勢を左右することは出来なかつた。今や我が國運の進展に際會し、彼我文化の交渉は刻下焦眉の急務となつて、支那語は商業語より再び文化語に復歸すべき時代

となつた。而して、兩者を融合し關係づけることは一に漢文教育の使命であつて、これを成就して始めて漢文無用論を一蹴し、漢文教育の新しき意義を發見し、時局の要求に副ふことが出来るのである。從來、此の兩者結合の事業が困難とせられたのは一には發音法の工夫が缺けたが爲である。我國では、支那語の發音を示すにウエード式を用ひることを以て常石として來たが、此の方法は西洋人に便利なる爲に考案されたもので、支那語の音理を覺えるには極めて不利である。故に自分は専ら支那に於て工夫された注音符號を採用し、僅かに三十七箇の符號を驅使して一切の發音を學習出来る様に試みた。注音符號は筆畫の最も簡單なる漢字を選んで象徴化したもので、即ち我國の先覺者が漢字を省略して假名を作つたのと全然同一の意圖に出で、其の濫觴に溯れば寧ろ假名を學んで考案されたものである。此は同じく漢字を使用する國民の極めて親密なる關係を物語るものであつて、其の發音もまた我國に古く傳へられて殆んど國語國音化せる所謂漢音吳音とたゞ古今南北の差異あるに過ぎざるもので、歐米人が新たに漢字を學び、一々其の音を記憶するに比して親疎難易の懸絶せるものがある。尤も羅馬字注音によつて發音の理解を助けることは強ひて避くべきことではない。此の發音記號を以て發音を學び中等學校

初學年より漢文はすべて支那語の發音によつて棒讀み
 することを習得せしむべきである。讀下すと同時に意
 義の理解をなすことによつて顛倒讀の煩瑣を避け、同
 時に支那語の構造を理解するの資とすることが出來、
 一舉兩得となるのである。只それには非常なる訓練を
 要することであるが、青少年の旺盛な知識慾を利用す
 れば立派な効果が得られる。とて、實際の指導をな
 し、自らの體驗を披瀝、新しき意義の漢文教育論に巨
 石を投せらるゝところがあつた。

○第廿二回研究發表會

一月十八日(土曜日)午後一時より漢文學科第一研究室
 に於て行ふ。

- 一、三論小考 學生 佐田 弘道君
- 一、黨仲舒の陰陽說に就きて " 佐川 修 君
- 一、水戸學に於ける " 古澤未知男君
- 神儒調和思想 " 會長 諸橋 教 授

一、講評
 右終了後、茶話會に移り、佐田君の發表に對しては内野
 熊一郎先輩の、佐川君の發表に對しては鎌田先輩の、御
 懇篤なる批評あり。有意義に會を閉づ。

御來會の先輩左の如し。
 内野・小島・渡邊・上島・市川・飯田・鎌田・陳蔡の諸氏。

○昭和十三年度會計報告

自昭和十三年三月六日至昭和十四年二月廿八日

差引 殘高	出 支		入 收	
	會計	會計	會計	會計
	揭示用紙代其他	會報第七號印刷代	繰越金	一三五・四六
	小使謝禮	同右發送費其他	會費	一一三・五〇
	通信費	會報第八號印刷代	貯金利子	・四二
	講演會茶菓代	同右發送費其他	會報賣上代	三・一〇
	倉石先生講演會諸雜費	高神先生講演會謝禮其他	合計	三五三・四八
	通信費	倉石先生講演會諸雜費		
	一七・六六	倉石先生講演會諸雜費		
	一三・二〇	倉石先生講演會諸雜費		
	一・〇〇	倉石先生講演會諸雜費		
	三二〇・三九	倉石先生講演會諸雜費		
	四二・〇九	倉石先生講演會諸雜費		

東京文理科大學漢文學會會則

- 一、本會ハ東京文理科大學漢文學會ト稱シ、事務所ヲ東京文理科大學漢文學研究室内ニ置ク
- 二、本會ハ漢文學ノ研究及ビ普及ヲ圖ルヲ以テ目的トス
 - 1 本會ノ會員ハ左ノ人々ヲ以テ組織ス
 - 2 東京文理科大學及ビ東京高等師範學校漢文學科關係ノ教官並ニ講師
 - 3 東京文理科大學漢文學科生及ビ卒業生
 - 4 東京高等師範學校文科第二部(國漢)生徒及ビ卒業生中漢文研究ニ篤志ナル者
 - 5 其ノ他ノ漢文學研究ニ篤志ナル者
- 三、本會ノ會員ハ左ノ人々ヲ以テ組織ス
 - 1 東京文理科大學及ビ東京高等師範學校漢文學科關係ノ教官並ニ講師
 - 2 東京文理科大學漢文學科生及ビ卒業生
 - 3 東京高等師範學校文科第二部(國漢)生徒及ビ卒業生中漢文研究ニ篤志ナル者
 - 4 其ノ他ノ漢文學研究ニ篤志ナル者
- 四、本會ノ主ナル事業左ノ如シ
 - 1 研究發表會
 - 2 講演會
 - 3 研究旅行
 - 4 雜誌發行
 - 5 其ノ他必要ナル事項
- 五、本會ニ左ノ役員ヲ置ク
 - 1 會長一名
 - 2 顧問若干名
- 六、會長ハ本會ヲ代表シ、會務ヲ總理ス
 - 3 評議員若干名
 - 4 委員十名
- 七、會長ニハ東京文理科大學漢文學科主任教授ヲ推ス
 - 1 評議員ハ東京文理科大學並ニ東京高等師範學校漢文學科關係ノ教官講師及ビ其ノ他ニツキテ會長之ヲ委囑ス
 - 2 顧問ハ評議員會ニテ之ヲ推薦ス
 - 3 委員ハ東京文理科大學漢文學科學生中ヨリ六名、其ノ他ヨリ四名、會員ヲ互選ニヨリテ選出シ其任期ヲ一ケ年トス、但シ重任ヲ妨ゲズ
 - 4 本會會則ノ變更ハ評議員會ノ議決ヲ經ベキモノトス
 - 5 會員ハ會費年額二圓ヲ納ムベキモノトス

以上